



Shanghai waltz

上海円舞曲

もつと貴女を愉しませてあげるわ

美鈴—。

【文〓ぜおらいまあ】

【編集〓もねてい】



「あつ……ああ、あはつ、やめ、おやめください、お嬢様……ああつー！」

「あら、私とだつて遊んでくれないとつまらないじゃない。——咲夜としていたように、ね！」

「いやいや、と首を振る美鈴の表情に、私は甘い怒りと陶酔を覚えた。

「黙らせたくて、腰を激しく動かして、彼女の秘部に私の杭を打ちつける。」

「ああああつー！ だ、だめです！ お嬢様、激し——いっ！」

「黙りなさい。咲夜もお前も……私のモノよ！」

「うあ、は、は、あ、あはあつ、もう、もう、私、イツちゃ……！ 咲夜さん、咲夜さん……！」

「目尻に涙を浮かべ、だらしなく開けた口元から唾液を滴らせる美鈴。彼女は罪悪感と快感を混ぜて昂ぶっていく。」

「ああ、なんて—— たまらない。」

「出すわ。——受け取りなさい！」

「だめです、お嬢様、中は、あつ、つ、い——く、うううツツ！」

「溢れ噴出す精液が、美鈴の膣内を蹂躞する。ふふ、この征服感は少し、クセになりそうね。」

「こめんなさい……咲夜さん」



「ん……くぅん……」

私を縛める縄が、ひどく優しく身体を撫でた。

「ふ、うん……んくぅ、咲夜さん……」

この牢屋に囚われてからもうどれだけ経つんだろう。昼夜の感覚はなくなってしまった。

もうすぐ、また私はイカされる。

どんなに我慢しても、どれだけ拒んでも、それが合図になってしまう。

「もう、いや……う？ 咲夜さん、助けて咲夜さん！

私、私もう、や……あああつ！」

そうして達する。それが、

「どうかしら、『晚責め立てられ続けた気分は』

「お嬢様……」

合図だ。

「さ、行くわよ美鈴。もっと貴方を愉しませてあげる」





「んぶう! うぐ、あ、はあ、あああつ! 」

「感度は良好、と。さすがに妖怪だけあって、タフさが売りね」

「パチュ、ひ、んうう、あ、は……! パチュリ、様、助け——ああ、痛い、やああ! 」

「気持ち良いでしょう? パチェもちょうどコイツの実験台が欲しかったようでね。貸してくれたのよ。」

「い、ん、あ、あああ! 激し、すぎ、んむ——ぐ、う……! 」

「大丈夫、そう簡単に壊れる事なんか出来ないし、壊しもしないわ。それじゃ意味がないもの」

まるでバケモノの体内に飲み込まれたみたいだ。蠢く内臓の全ては、私に快楽を与えるためだけに存在していた。

私を捕らえる植物の触手はキツく身体を縛りあげ、身動きできない獲物を、欲求のままに弄ぶ。

容赦なく私の膣内で暴れ回る触手。荒々しく私の乳房を食らう触手。

どの触手の動きも激しく荒っぽく、優しさのカケラも感じられない。

なのに——

「んぶ、う、あ、ああ! 痛いの、に、なんで、なんで……私、いや、また…あ、ツク! や、イヤツツ——! 」

このバケモノに何もかもを食らい尽くされる。なのに、私の頭は、快感と快楽だけで満たされていく……。

「……あ、あはあ、もう、も、う……許してくだ……さい、お嬢様——」

「うーん。まだもうちょいイケそうね。次はもうちょっと激しくいくわよ」

「んむ……はあ、んぶ、ちゅ、ん……」

「いいわ、気持ち良い。その調子よ、咲夜」

「は、い……んん、ちゅ、えふ、んん」

お嬢様は満足そうに笑って、私の頭を優しく撫でた。嬉しくなって、一層、お嬢様への奉仕に力を籠める。

「素敵よ咲夜。そう、今度はカリ裏を」

「はい。お嬢様……ん、ほ、ほうへふか？」

「そう、あ、ああっ！ キモチ、い……！ ひゃ、咲夜あっ！」

「んふ、ふ——うん、んぶうっ」

ピクピクと震えるお嬢様の細く柔らかい腰を抱き寄せ、口いっぱい肉棒を頬張る。

「咲夜、それ、スゴ、あはっ！ ダメ、もう出ちゃ——」

「らひて、くだひゃい……んぶ、んっ、んっ」

……キモチいい。まるで私の口が性器になったみたいで、少しだけ恥ずかしくなる。

「んんっ、んっんっんっんっんぶ、ん——」

「ダメ、もう、や、出る、出……っ！」

溢れ出る匂いを感じて、最後の瞬間、一気に喉元へと肉棒をくわえこむ。

お嬢様の苦悶じみた絶頂と同時に、私だけの熱い精液が、直接、咽頭へと流れ込んでくる。

「んぶ……ん、ん、ふ……っ！」

私の口から逃れようと腰を引きかけたお嬢様の腰を抱き締め、私は、口内を蹂躪する射精の快感に気をやった。凄い、熱い。

「あは……お嬢様、可愛かったですよ」

「は、は、はあ……もう、咲夜ったら、淫乱みたいよ、それ」

「いいんです。私と——美鈴は、もうお嬢様のモノなのですから」

「……そう。それなら、いいわよね」

私を見下すお嬢様の瞳が、淫猥に輝いている。なんて……美しい。



「ふうん……? ずいぶん、感じやすくなってるのね」

「ひゃ、ひやくやひゃ、ふひゃ、ああっ!」

咲夜さんの言葉はまるで棘のようなのに。触れる手の、なんて優しいことだろう。

「ん、んぶうつ、んん……んふあ、は……!」

奪われた歳月を塗り返すように。咲夜さんは私の身体を丁寧に、執拗に責め立てながら、耳元で囁き続ける。

「でも、いいの。私も美鈴も、お嬢様の所有物なのだから。……でも、嫉妬しちゃうわ、ね!」

「ふッ、んあんんっ——!」

ギリ、と摘み上げられた乳首の痛みに悲鳴を上げる。ああ、でも……。

「こんなのまでキモチいいのね。……いいわ。

お嬢様、私達と遊んでくださいますかしら」

「もちろんよ。ふふ……なんて可愛いのかしら、私のオモチャ達は」

「ひやくやひゃ、ふあへ、ふあめ……ふ、はああっ!」

咲夜さんの愛撫だけで、もう何度達したか分からないのに。

「とりあえず、私のも可愛がってもらえるかしら。貴方達を見ていたらもう、我慢、出来そうにないわ」

「はい、お嬢様」

「ふっ、んあい……」

愛しい二人に愛されたら、私、どうなってしまうのか、分からない……。





「いい、いいわ美鈴! 貴方の中、素敵よ……!」

「ふうう……! ふんぶうつ、んんんつ、ぶあつ、あああう!」

あれからもう何時間経ったのだろう。

まるで尽きる事のないお嬢様と咲夜さんの愛情を、私は快感に身を浸しながら、ただただ受け入れ続けている。

「お、嬢あ、さまあつあつ、つく……イきまつう……!」

「あらダメよ。私はまだまだ感じたいのだから。私が出すまで許さないからね」

「ヤ、ああつ……ム、リでつあ、ふあ、あああああ!」

「あーあ、イっちゃった。でもいいわ。貴方の中、ヒクヒクしてもっとキモチいい……続けるわよ」

「美鈴……可愛いわよ。ふふ、お嬢様の次は私が貴方を愛してあげる……!」

「ああああつ! イツ、イツてる、の、ひいあ、んん、んんんああつ!」

閉ざされた視界。なのに、見える世界は真っ白だった。

征服という甘い絶望と、焼きつくような墮落と快感が全身を支配して、それだけが、私の全てになっていく。

「何度でも、何度だって、出してあげるし愛してあげる。イキ狂いなさい、私達の、愛しい美鈴……!」

「ぶあ、あうつ、あ、はあつ、あつあつあつあつ! イックう、イグの、イツ、——ああああああつツ!!」



きこふいれも、幸せと言えるのだらう。

END.





ようこそ幻想と現(うつ)の狭間へ

2012.6.4



天より来たりて

2012.5.19



嫉妬姫への欲望

2012.6.19



死を恐れぬ者

2012.4.30



君に私が倒せるかしら？

2012.7.13



鵺的スネークショー

2012.3.6





この私に挑もうってのかい?

2012.2.23



少女の誘惑

2012.5.21



ち、違うのこれはっ
師匠にどーしてもやれって
命令されただけでっ…

お願いだから……
こっち見ないでっ…

あっ
あぁ…

ひく

俺達のバレンタインはこれからだ!

2012.2.14





従者6人によるムーンライト伝説

2012.3.29



お手にとっていただきありがとうございます。もねていです。

画集第3弾です。

甘々なめーさくエロを考えていたはずがこうなりました。

めーりん可愛すぎたので苛めたくなりました。

苛めているところしか妄想できませんでした。

つまり、そういうことだッ——(刊ッ

漫画に挑戦したいと思いつつも勇気がなかったので今回はこのような形になりました。

毎度のことながら中途半端なR-18本で申し訳ないっす orz

そして今回、急なお願いに快く承諾して下さった、ぜおらいまあさん、本当に助かりましたありがとうございました!!!

おぜうを超Dにしてほしいとお願いしたら素晴らしいおぜう様になって帰ってきました… さすがですw

もっと抜き絵になれるよう頑張ろう…次の本は↑にあるようなDめーりんも描いてみたいなあ。

というわけでまた次回の本でお会いしましょう 〆〆

ぜおらいまあ氏(ニコニコのID)=<http://www.nicovideo.jp/user/1266426>

2012.8.11

もねてい

発行 : MONEけしごむ

発行者 : もねてい

発行日 : 2012年8月11日

印刷 : グラフィック様

連絡先 : daifuku1285@yahoo.co.jp

: pixiv ID = 3066815

* 本誌は18歳以上の方を対象としております。

18歳未満の方の購入・閲覧はお断りいたします。

* 本誌の無断転載、複写、ネット上への無断公開を禁止致します。

